

# 2016年度 本州太平洋におけるサケ回帰状況 (第1報：10月31日現在)

国立研究開発法人水産研究・教育機構  
東北区水産研究所 沿岸漁業資源研究センター

- ・10月31日現在までの本州太平洋側の地域全体のサケ来遊数は前年および平年を下回っている
- ・2015年の同時期に、4年魚が顕著に少なかった河川で5年魚が少なく、累計捕獲数が近年で最も少なくなっている

※11月の最盛期に向けて引き続き今後の動向を注視する必要があります

## 1. サケ来遊概況

10月31日現在の本州太平洋側（竜飛岬から東の青森県～茨城県）におけるサケ来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計）の累計値は134万尾<sup>※1</sup>（前年同期：61%）と前年を下回り、平年同期（1989～2015年の平均値、369万尾）との比較では36%という状況です（図1）。

河川捕獲数の累計値は13万尾（前年同期：57%）と前年を下回り、平年同期（34万尾）との比較では38%となっています。なかでも岩手県において、前年比が45%と低調であり、河川捕獲親魚だけでは種卵が不足し、昨年に引き続き、海産親魚からの採卵が行われています。さらに、同県では台風10号による河川の増水により複数のふ化場が冠水や土砂流入といった被害を受け、中でも県営県北ふ化場、下安家ふ化場、小本ふ化場、松山ふ化場では壊滅的な被害を受けたため、親魚の捕獲、あるいは種卵の管理が困難な状況となっています。

※1: 青森県（太平洋）、岩手県、宮城県の河川捕獲数および沿岸漁獲数（10月31日現在）、福島県の河川捕獲数（10月31日現在）、及び茨城県の河川捕獲数（10月10日現在）の累計値

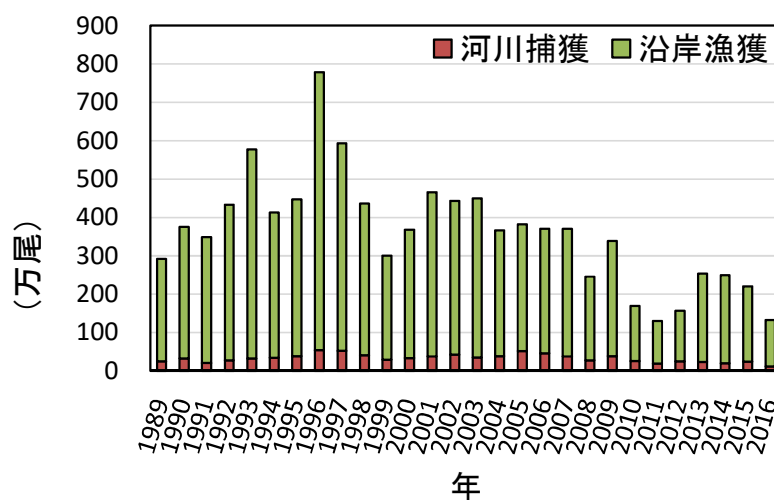


図1 8月1日～10月31日までの本州太平洋側におけるサケ来遊数（累計値）の経年変化

## 2. 年齢別河川捕獲数

現在までに年齢が判明している川内川、奥入瀬川<sup>※2</sup>、新井田川、田老川、津軽石川<sup>※2</sup>、織笠川<sup>※2</sup>、片岸川<sup>※2</sup>、盛川、気仙沼大川、北上川の9河川（図2）について年齢別の河川捕獲数をまとめました。（奥入瀬川は年齢データが10月中旬までのため、累計捕獲数も10月20日現在で比較）

青森県の川内川、奥入瀬川、新井田川では、累計捕獲数はそれぞれ前年比98%、134%、47%となっており、新井田川で前年を下回りますが、いずれも過去の変動の範囲内となっています（図3）。

岩手県では、田老川、津軽石川、織笠川、片岸川で累計捕獲数が低調となっており、2006年以降で最も少ない状況です。中でも2015年の同時期に、4年魚が極端に少なかった津軽石川、織笠川、片岸川では、本年の5年魚も顕著に少なく、累計捕獲数の減少に影響しています。一方、盛川では4年魚、5年魚が前年より多く（前年比それぞれ121%、161%）、累計捕獲数は過去の変動の範囲内となっています（図3）。

宮城県の気仙沼大川、北上川では、累計捕獲数はそれぞれ前年比88%、71%といずれも前年を下回りますが、気仙沼大川では捕獲数が減少した2010年以降の変動の範囲内、北上川では過去の変動の範囲内となっています。また、北上川では捕獲数に占める5年魚の割合が4年魚を上回っています（図3）。（気仙沼大川、北上川は年齢データが10月中旬までのため、累計捕獲数も10月20日現在で比較）



図2 2016年度 年齢調査河川（予定を含む）。安家川は台風10号の影響で10月31日現在、河川捕獲の目途はたっており、年齢調査も実施困難な状況。

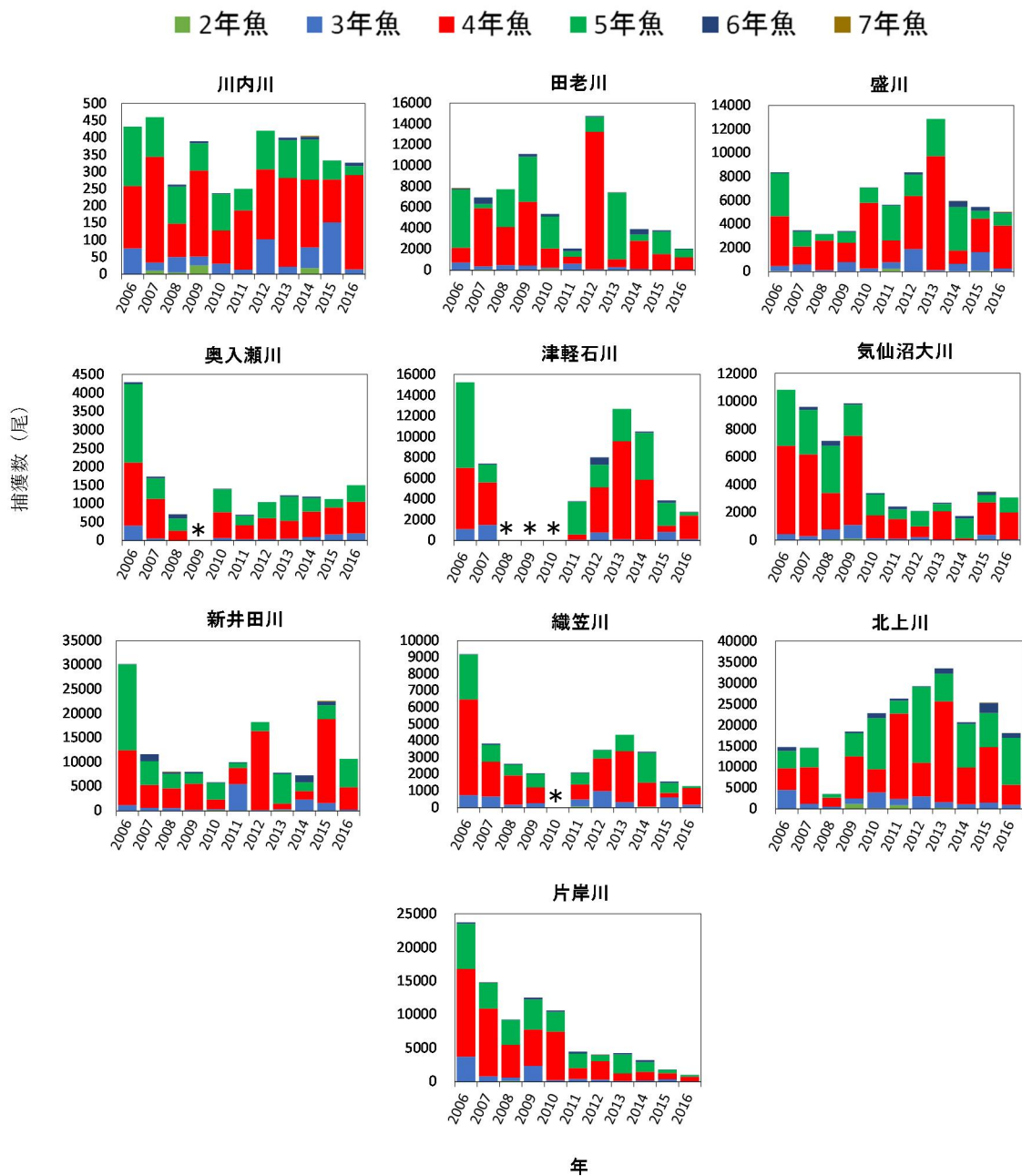


図3 年齢別の河川捕獲数（10月31日現在までの累計値）の経年変化。奥入瀬川、気仙沼大川、北上川は10月20日現在までの累計値。\*は調査を実施していないことを示す。

※2:奥入瀬川は青森県産業技術センター、津軽石川、織笠川、片岸川は岩手県水産技術センターのデータ